

「外国語活動」に対する大学生の知識と不安感の変化 —「外国語活動 I」を受講した学生を対象とした 5年間の意識調査を通して—

物 井 尚 子

千葉大学・教育学部

University Students' Knowledge and Anxiety about Foreign Language Activities: Through the Five-year Administration of a Questionnaire to the University Students who Took a Course Called “Foreign Language Activities I”

MONOI Naoko

Faculty of Education, Chiba University

本研究では「外国語活動 I」（半期、15回）を履修する学生に対して、2010～2015年（2013年を除く）の5年間にわたり履修前後に質問紙調査を実施した。当該科目を履修した学生の小学校英語に関する知識・理解および不安感の変容を明らかにすることを調査の目的とした。参加者は140名の教育学部に在籍する学生（2010年度32名、2011年度24名、2012年度38名、2014年度25名、2015年度21名）である。収集されたデータは二元配置分散分析を用いて分析された。その結果、「外国語活動 I」を履修することにより、この分野に関する知識を深めたと履修者が認識していることが確認された。また、年度によってばらつきはあるものの、履修により、統計的な有意差をもって不安感を軽減できていることが明らかになった。ただし、指導案の作成、単元の組み方、カリキュラム構築など、より実践に直結する内容については、依然履修者に不安が残る結果になった。

In this study, the author administered a questionnaire to a group of university students who registered for the class “Foreign Language Activities I” (held in the first semester, 15 lectures) prior to and after the course for five years (2010 to 2015, except for Year 2013). Participants were 140 students who took the course in the Faculty of Education (32 students in 2010, 24 students in 2011, 38 students in 2012, 25 students in 2014, 21 students in 2015). The collected data were statistically analyzed using two-way ANOVA. The results revealed that the participants were aware that their knowledge of early English education increased through taking the course. They were also aware that they decreased their anxiety about early English education through taking the course although the degree of their anxiety varied annually. The decrease in their anxiety from the beginning to the end of the course showed a statistically significant difference. However, some practical contents taught in the course such as how to make lesson plans, how to make a unit of lessons, how to build a curriculum still remained worries for the participants.

キーワード：質問紙調査（Analysis in Use of Questionnaires）

小学校英語（English for Elementary School Students） 外国語活動（Foreign Language Activities）

教員養成（Teacher Training） 不安（Anxiety）

1. はじめに

2016年8月1日に文部科学省が『次期学習指導要領改訂に向けたこれまでの審議のまとめ（素案）』を発表し、新聞紙面を賑わせた。各社見出しは、高校でのICT活用、アクティブ・ラーニングなど様々であるが「小学校5年生から英語が教科化」というように小学校での英語教育に関するものが多く、国民の関心の高さが伺える（朝日新聞、日本経済新聞、毎日新聞等）。

2013年12月に文部科学省が公表した『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』で提案された、中学年からの外国語活動開始、高学年の教科型英語教育という実施学年の早期化の方向性は維持され、実施時間も確定した（中学年が35単位時間、高学年が年間70単位時間¹⁾）。

指導者については、高学年において専科教員という文言が含まれるものの、外国語活動の主たる指導者は学級担任である立場を文部科学省は崩していない（2016, p. 10）。そのため、英語の指導力を備えた小学校教員の輩出は教員養成系大学に課された重要課題の一つと捉えることができる。その要求に応えるために、本学教育

連絡先著者：物井尚子 nmonoi@faculty.chiba-u.jp

学部では、在籍する学生に対して「外国語活動Ⅰ」「外国語活動Ⅱ」「小学校英語教育実践」等、小学生に対する語学教育（英語教育）に必要な知識を授け、技能を育てる科目群を提供している。特に「外国語活動Ⅰ」は小学校教員養成課程の1年生が主たる履修者であり、彼らが初めて外国語活動に関する知識を獲得する科目として位置づけられている。筆者は2010～2015年（2013年を除く）の5年間にわたり、本科目を担当している。本科目が学生の小学校での英語教育に必要な知識の獲得、また学生の不安の軽減に役立っているのかという問い、そして2011年に外国語活動が必修化され、この5年の間に小学校での英語教育を取り巻く環境が大きく変化している。その期間に、本科目を履修する学生たちの意識に変化があったのか、という2つの問いに答えることが本研究の目的である。

2. 先行研究

本章では、外国語活動の実施状況を確認し、次に教員養成系大学における小学校での英語教育における科目の設置状況について先行研究を整理し、最後に本学部で提供される「外国語活動Ⅰ」に関する状況をまとめる。

『平成23年度小学校外国語活動実施状況調査』（文部科学省、2012b）によれば、主に外国語活動を指導しているのは学級担任が多く、全体の73.0%を占めている（表1）。さらに7年を遡った『平成19年度小学校英語活動実施状況調査集計結果』（文部科学省、2008）では、第5、6学年の英語活動指導者数における学級担任の割合が各学年それぞれ94.6%（第5学年）、94.0%（第6学年）であった。当時は、「特別非常勤講師」という立場で英語活動に関わった講師が全体の約1%を占めていたが、今回の調査では「外国語活動を専門に指導する小学校教員（専科教員）」という名称にそれが変化し、3.9%となっていること、また「その他」という枠で19.3%の教員が外国語活動に関わっている。この枠には、保護者や地域人材を活用する日本人ボランティア、或いはJTE（Japanese Teachers of English）のように、外国語活動のために各小学校に配属される外部人材を含むのであろうか。また、『平成23年度公立小学校・中学校における教育課程の編成・実施状況調査』（文部科学省、2012a）によれば、外国語活動等実施時数のうち約7割の授業に、ALT（外国人指導助手）が活用されている。

表1 外国語活動を担当する指導者の割合

	件数	構成比 (%)
学級担任	2,305	73.0
外国語活動を専門に指導する小学校教員 (専科教員)	122	3.9
学級担任、専科教員以外の小学校教員	54	1.7
中学校や高等学校の英語教員	19	0.6
その他	609	19.3
無回答	48	1.5

(文部科学省 (2012b) 『小学校外国語活動実施状況調査』)

次に、教員養成系大学における小学校での英語教育に特化した科目の設置状況についてまとめる。東京学芸大学が文部科学省委託事業として行った『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業』（2016）が全国規模の調査では最新の情報となる。この中の、教員養成・教員研修全国調査では、小学校教員免許状取得の課程認定を受けている大学・学部241機関に「初等調査」のための質問紙が配布された。質問紙の回収率は97機関（40.2%）であった（p.17）。初等教育教職課程において、英語教育の専攻・専修・コースを設けている大学は25校（25.7%）を占め、41の課程・コースが設置されていた。この25大学が初等教育教職課程において開設している外国語活動に関わる授業数は54授業科目であった。授業内容として最も多く扱われているものには「外国語活動・外国語科における教材」（26授業科目にて）、「事例研究・授業の作り方」（科目数非公開）「4技能の指導①（聞くこと・話すこと）」（科目数非公開）が挙げられた。一方、「小中高連携」「外国語科の模擬授業」「4技能の指導②（読むこと・書くこと）」（いずれも科目数非公開）の扱いが少なかった。さらに、同機関に、この先の学習指導要領改訂を受け、授業内容の扱いで重要視すべき項目について5件法で回答してもらったところ、数値が高かったのは総じて実践的な内容であった（「事例研究・授業の作り方」（ $M=4.71$ ）、「4技能の指導①（聞くこと・話すこと）」（ $M=4.67$ ）、「外国語科の模擬授業」（ $M=4.62$ ）、「外国語活動の模擬授業」（ $M=4.59$ ））。

次に、本学部で提供している科目を説明する。小学校での英語教育に関する科目は5科目（「授業研究入門²⁾」, 「外国語活動Ⅰ」, 「外国語活動Ⅱ」, 「小学校英語演習」, 「小学校英語実践」（いずれも半期2単位））が提供されている²⁾。このうち、「授業研究入門」は小学校教員養成課程小学校英語選修の学生のみが受講する必修科目（1年次前期）であり、選修の学生が初めて英語教育という観点から実習に関する基礎的な指導を受ける科目である。「外国語活動Ⅰ」, 「外国語活動Ⅱ」は小学校英語選修の学生にとっては必修科目（小学校英語選修の学生は1年次の前期、後期にそれぞれの科目を履修）、小学校教員養成課程の他選修および中学校教員養成課程の学生にとっては選択科目（履修学年は様々）としての提供となる。「小学校英語演習」, 「小学校英語実践」は小学校英語選修の学生にとっては選択必修科目（選修の学生は2年次の前期、後期にそれぞれの科目を履修）、小学校教員養成課程の他選修および中学校教員養成課程の学生にとっては選択科目（履修科目は様々）となる。これらの科目の中で、小学校で行われる英語教育を指導するための基礎知識を学ぶ科目は「外国語活動Ⅰ」であり、例年30名前後の学生が受講する。

最後に、「外国語活動Ⅰ」を受講した学生の知識・不安感の変化をまとめた先行研究（物井、2011、2012）を振り返る。2010～2011年の2年間で外国語活動を受講した56名（2010年度受講者は32名、2011年度受講者は24名）に対し、履修前と履修後の2回にわたり質問紙調査を実施した。その結果、受講者全員が、履修前後を比較して、講義により小学校での英語教育に関する知識を得たと認識していた（ $F(1, 54) = 429.02, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .89$ ）。

その知識の向上に連動する形で、受講者は履修後、知識不足から生じる不安を払拭したと感じていた ($F(1, 54) = 57.79, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .52$)。松宮 (2008) の広島大学での実践でも、同様の結果が示されている。さらに、学生の小学校での英語教育に関する知識と不安感の間に高い負の相関が確認された ($r = -.79, p < .01$)。また、受講年度によって、知識の向上、および不安感の軽減に対する回答に有意な差は生じていないことが確認された。さらに、受講者の専門が英語教育であるか否か (英語教育を専門とする学生33名、その他の学生23名) により、回答に有意差がないことも併せて確認された。

これらの先行研究を踏まえ、今回の調査では、2011年の外国語活動必修化、2013年の『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』の発表という英語教育を取り巻く社会的な変化を背景に、「外国語活動 I」という同一科目を受講する学生たちの意識が5年間に変動を見せるのかを調査する。

3. 研究課題

本研究では、2010～2015年 (2013年を除く) の5年間、本学部の提供する「外国語活動 I」(半期、15回) を受講した学生に対し、受講前の4月と受講後の7月に同一の質問紙調査を実施、学生の小学校での英語教育に関する意識の変化について、以下の4点を調査した。

- 1) 「外国語活動 I」の履修前後で、参加者は小学校での英語教育に関係する知識が変化したと感じているか。
- 2) 年度によって、知識の変化に対する認識に違いはあるか。
- 3) 「外国語活動 I」の履修前後で、参加者は小学校での英語教育に関する不安感が変化したと感じているか。
- 4) 年度によって、不安感の変化に違いがあるか。

4. 調査方法

4.1 参加者

本調査における参加者は、教育学部小学校教員養成課程小学校英語選修および中学校教員養成課程に在籍する学生のうち、2013年を除く2010～2015年に「外国語活動 I」(半期、15回) を履修した140名である。

表2 年度別履修者数

年度	履修者数
2010年	32名 (小学校英語選修11名, その他21名)
2011年	24名 (小学校英語選修11名, その他13名)
2012年	38名 (小学校英語選修11名, その他17名)
2014年	25名 (小学校英語選修11名, その他14名)
2015年	21名 (小学校英語選修11名, その他10名)
合計	140名 (小学校英語選修55名, その他85名)

4.2 「外国語活動 I」に関する質問紙

本研究では「外国語活動 I」に関する質問紙として物井 (2010, 2011, 2012) で使用された尺度を参考に、修

正したものを使用した (資料1)。質問紙は、①外国語活動に関する知識を問うもの (39項目)、②外国語活動に関する不安感を問うもの (39項目)、③小学校での英語教育に関する賛否を問うもの (1項目)、の3カテゴリ、79項目から構成される。これらの質問については5件法を採用した。さらに、①～③に1項目ずつ記述式の問いを用意した (3項目)。合計82項目から成る。

4.3 手順

データは5年間にわたって収集された。2010～2015年の「外国語活動 I」初回の授業において (4月)、および最終回の授業において (7月)、質問紙調査を実施、授業担当者である筆者が行った。所要時間は約15～25分であった。調査は、各人の変容を確認するため、記名式とした。

4.4 「外国語活動 I」のカリキュラム

「外国語活動 I」は半期科目であり、15回の授業から構成された。各回での授業内容については資料2に示す。シラバス作成時には、小林・宮本 (2007, 2010) の早期英語教育者研修プログラム作成の枠組みを参考にした (表3)。以下の6つの研修領域のうち、半期科目という時間的制約、また他科目で指導できる内容を考慮し、研修領域A～Dを網羅することに専念し、カリキュラムを作成した (物井, 2011)。4つの研修領域を踏まえ、具体的な授業内容については、他大学で開講されている同様の科目、および市販の小学校教員研修用テキストを参考にした (『小学校外国語活動研修ハンドブック』(文部科学省, 2009) 等)。主たる内容としては、年間指導計画の立案と考え方、外国語学習に関するシラバス (指導計画) の知識、言語習得理論の基礎知識、心理学からの知見、代表的な外国語教授法、小学校外国語活動における評価の考え方、国際理解・異文化間コミュニケーション・国際交流に関するもの、が含まれる。

表3 早期英語教育指導者研修プログラムの枠組み

研修分野	研修領域
早期英語教育の理論と実践 (専門的知識・技能基盤)	A. 基礎知識 (approach)
	B. 教授法 (method)
	C. 指導技術 (technique)
	D. 指導者の自己開発 (development)
英語運用能力	E. 英語運用能力 (English)
指導実践	F. 指導実践 (practicum)

(小林・宮本, 2007)

4.5 データ分析

データ分析を行うにあたって、まずは質問紙の信頼性を確認し、その後、①「外国語活動 I」の履修前後で、参加者は小学校での英語教育に関する知識が変化したと感じているか、②年度によって、知識の変化に対する認識に違いはあるか、の2点について、二元配置分散分析 (時間×年度) を行い、③「外国語活動 I」の履修前後で、

参加者は小学校での英語教育に関する不安感が変化したと感じているか、④年度によって、不安感の変化に違いがあるか、についての二元配置分散分析（時間×年度）を実施した。分析にはSPSS ver. 21.0（SPSS, Inc., 2012）を使用した。

また、記述式の項目については、参加者の記述文を単語ごとに分け、頻度の高い単語・表現を調べた。

5. 結 果

本節では、調査の結果を研究課題に沿って詳述する。初めに、質問紙の信頼性係数を確認したところ、履修前の調査ではCronbach's $\alpha = .915$ 、履修後の調査ではCronbach's $\alpha = .894$ という値を示した。次節では、研究課題に沿って結果を記述する。

5.1 「外国語活動Ⅰ」の履修前後で、参加者は小学校での英語教育に関する知識が変化したと感じているか

図1は「外国語活動Ⅰ」の履修前後における参加者の小学校での英語教育に関する知識の変容を年度別にまとめたものである。先述のように知識を問う項目は39項目あり、それぞれについて5件法で回答するため、回答の最小値は39、最大値は195であった。参加者全員の平均値は $M_{pre} = 89.74$ から $M_{post} = 152.63$ に上昇した。

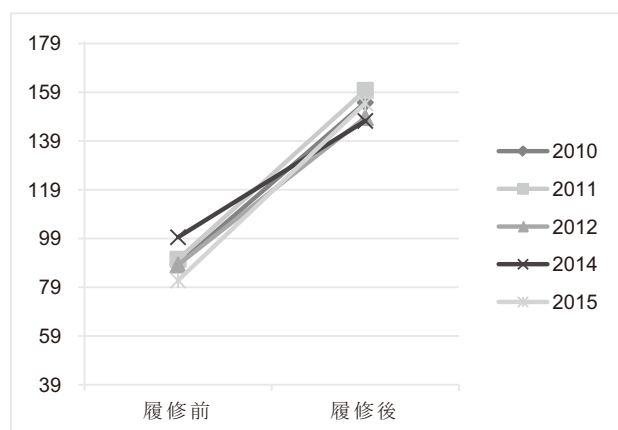


図1 履修前後における参加者の知識の変容（年度別）

二元配置分散分析の適用条件であるデータの正規性および分散共分散行列等質性が確認できたので、時間（履修前、履修後）×年度（2010, 2011, 2012, 2014, 2015年度）による対応のある二元配置分散分析を行った。その結果、時間と年度の交互作用が有意であったため（ $F(4, 135) = 3.65, p < .01, \text{partial } \eta^2 = .10$ ）、単純主効果の検定を行った結果、時間の要因において、履修年度を越えて履修後の数値が有意に高いことが確認された（ $F(1, 135) = 836.22, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .86$ ）。効果量も高い値が確認された。一方、年度の単純主効果には有意差が見られなかった（ $F(4, 135) = .83, p < .51, \text{partial } \eta^2 = .02$ ）。

表4 繰り返しのある二元配置分散分析の結果

ソース	タイプⅢ 平方和	自由度	平均平方	F値	有意 確率	偏イータ 2乗
時 間	268,188.83	1	268,188.83	836.22	.000	.86
年 度	992.31	4	248.08	.83	.510	.02
時間×年度	1,684.18	4	1,171.04	3.65	.007	.10
誤 差	43,296.52	135	320.71			

5.2 年度によって、知識の変化に対する認識に違いはあるか

前節で示した二元配置分散分析の結果から、年度の単純主効果には有意差が見られなかった（ $F(4, 135) = .83, p < .51, \text{partial } \eta^2 = .02$ ）。よって、履修年度によって参加者の知識の変化に対する認識には違いが確認されなかった。

5.3 知識があると感じる項目と知識が乏しいと感じる項目

それでは、5年間を通じ、参加者が知識があると感じた上位5項目と乏しいと感じる5項目（表5）を履修前後で比較してみる。当然ながら、履修後は上位項目の数値が全体として高くなっている。項目を俯瞰してみると、履修前は、小学校での外国語活動の意義、公立小学校での英語教育の現状等、社会の反応を含めた教育制度的な知識が上位を占めていたが、履修後は絵本の用い方、歌・リズムの指導等、授業で自らが実践できる具体的な指導方法が上位となり、知識について順番の入れ替えが起こっていることが確認された。

表5 履修者が知識があると感じた上位5項目

履修前	順位	履修後
日本の公立小学校で外国語活動をはじめる意義 (2.99)	1	絵本を用いた指導 (4.41)
公立小学校における英語導入の現状 (2.66)	2	歌・リズムの指導 (4.38)
「外国語活動」の時間と中学・高校の英語の授業との繋がり (2.65)	3	教員が授業で使える英語表現 (4.37)
授業で指導する内容 (2.64)	4	授業で指導する内容 (4.36)
歌・リズムの指導 (2.64)	5	外国語活動で使用できる教授法 (4.31)

表6は、知識量が乏しいと感じる項目を数値が小さい方から5項目並べたものである。履修後は、知識が乏しいと感じられる項目でさえ、3以上の値を示しており、「外国語活動Ⅰ」履修の効果が確認できた。ただし、カリキュラムの作り方、指導案の書き方、教材の上手な作り方という3項目は、履修後においても、引き続き参加者が知識の乏しさを痛感していたことがわかる。自らの授業実践と直結した内容であることが共通項である。

表6 履修者が知識が乏しいと感じた上位5項目

履修前	順位	履修後
カリキュラム（1年間の指導計画）の作り方（1.69）	1	東アジア（台湾、韓国、中国）の英語教育（3.29）
1単元（2～4コマ）の組み立て方（1.73）	2	指導案（1コマ）の書き方（3.41）
指導案（1コマ）の書き方（1.79）	3	インターネット、電子黒板などのマルチメディア活用法（3.44）
授業で小学生が使う教材の上手な作り方（1.89）	4	英語の発音のコツ（3.50）
授業で小学生が使う教材の上手な選び方（1.95）	5	授業で小学生が使う教材の上手な作り方（3.54）
	5	カリキュラム（1年間の指導計画）の作り方（3.54）

5.4 「外国語活動Ⅰ」の履修前後で、参加者は小学校での英語教育に関する不安感が変化したと感じているか

次に、参加者の不安感について結果を述べる。図2は「外国語活動Ⅰ」の履修前後における参加者の小学校での英語教育に関する不安感の変容を年度別にまとめたものである。不安感をたずねる項目は知識を問う項目と対応しており、39項目である。それぞれについて5件法で回答するため、回答の最小値は39、最大値は195であった。参加者全員の平均値は $M_{pre}=140.89$ から $M_{post}=108.26$ に数値が減少した。

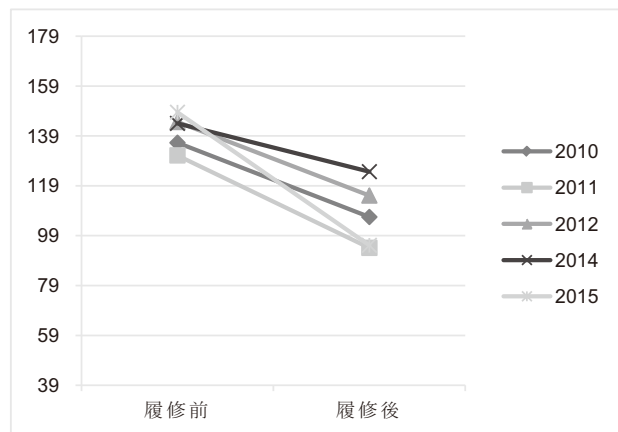


図2 履修前後における参加者の不安感の変容(年度別)

二元配置分散分析の適用条件であるデータの正規性および分散共分散行列等質性が確認できたので、時間（履修前、履修後）×年度（2010、2011、2012、2014、2015年度）による対応のある二元配置分散分析を行った。その結果、時間と年度の交互作用が有意であったため（ $F(4, 135) = 3.10, p = .018, \text{partial } \eta^2 = .08$ ）、単純主効果の検定を行った結果、時間の要因において、履修年度を越えて履修後の数値が有意に低いことが確認された（ $F(1, 135) = 130.17, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .49$ ）。効果量も高い値が確認された。一方、年度の単純主効果においても有意差が見られた（ $F(4, 135) = 4.45, p = .002, \text{partial } \eta^2 = .12$ ）。効果量は小さい値を示した。

表7 繰り返しのある二元配置分散分析の結果

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率	偏イータ2乗
時間	153,044.97	1	153,044.97	130.17	.000	.49
年度	7,338.88	4	1,834.72	4.45	.002	.12
時間×年度	7,276.45	4	1,819.11	3.10	.018	.08
誤差	158,719.51	135	1,175.70			

5.5 年度によって、不安感の変化に違いはあるか

前節で示した二元配置分散分析の結果から、年度の単純主効果において有意差が見られた（ $F(4, 135) = 4.45, p = .002, \text{partial } \eta^2 = .12$ ）。よって、Dunnettを用いた年度間の多重比較検定を行った結果、2011年と2012年（ $p = .015$ ）、2014年（ $p < .001$ ）の間にそれぞれ有意差が見られた。2011年は5年間の調査で、履修前、履修後ともに不安感が最も低く、2014年、2012年は履修前の不安感の値が高く、履修後も数値の減少が乏しかった。

5.6 不安が強いと感じる項目と知識が乏しいと感じる項目

5年間を通じ、参加者が強く不安に感じた上位5項目（表8）と不安が少ないと感じる5項目（表9）を履修前後で比較してみる。履修後は上位項目の数値が全体として低下しているのは当然であるが、項目を比較すると、上位3項目は共通していることがわかる（カリキュラム（1年間の指導計画）の作り方、1単元（2～4コマ）の組み立て方、指導案（1コマ）の書き方）。この3項目については、5.3で述べたように履修者が知識が乏しいと感じた上位5項目にも含まれている。

表8 履修者が強く不安に感じた上位5項目

履修前	順位	履修後
カリキュラム（1年間の指導計画）の作り方（4.11）	1	カリキュラム（1年間の指導計画）の作り方（3.50）
1単元（2～4コマ）の組み立て方（4.06）	2	指導案（1コマ）の書き方（3.28）
指導案（1コマ）の書き方（4.04）	3	1単元（2～4コマ）の組み立て方（3.24）
授業で小学生が使う教材の上手な作り方（3.94）	4	ライティングの指導（3.20）
授業で小学生が使う教材の上手な選び方（3.89）	5	英語の発音のコツ（3.16）

同様に、不安が低いと感じる5項目についても、4項目が共通していることが明らかになった（外国語教育が公立小学校に導入されるようになった経緯、公立小学校で外国語教育を始める意義、公立小学校における英語導入の背景、東アジアの英語教育、絵本を用いた指導）。

表9 履修者が不安に感じない上位5項目

履修前	順位	履修後
外国語教育が公立小学校に導入されるようになった経緯 (3.14)	1	絵本を用いた指導 (2.27)
日本の公立小学校で外国語教育を始める意義 (3.16)	2	歌・リズムの指導 (2.40)
公立小学校における英語導入の背景 (3.31)	3	教室内でできる外国語活動に向けての環境づくり (2.49)
東アジア (台湾, 韓国, 中国) の英語教育 (3.32)	4	英語の発音のコツ (2.52)
絵本を用いた指導 (3.39)	5	外国語教育が公立小学校に導入されるようになった経緯 (2.58)
	5	日本の公立小学校で外国語教育を始める意義 (2.58)
	5	公立小学校における英語導入の背景 (2.58)

5.7 参加者の記述から

「外国語活動Ⅰ」に関する質問紙の③小学校での英語教育に関する賛否を問うカテゴリーは「公立小学校で英語で英語を教える必要はないと思う」に答え、次にその理由を記述する、という形式になっている。この項目には、5年間を通じて最も多くの履修者がコメントしており、また記述された内容も、年度によって異なるため、記述項目としてこの問いを取り上げる。その際、授業の影響ではなく、もともと履修者本人が考えていた公立小学校での英語教育導入の賛否を知るため、履修前の調査結果のみを対象とする。

問1に対する回答を、年度を因子として一元配置分散分析を行った結果、年度の違いによる回答に統計的な有意差は見られなかった ($F(4, 134) = .85, p = .498, \eta^2 = .02$)。次に、問20の記述内容において、頻度の高い表現を列挙する。

2010年は「どちらでもない」を選択した学生が32名中12名と3割強が中立の立場を示していた(図3)。図4には記述欄に頻繁に出てきた表現を年度別で示している。この時期に顕著だったのは「英語の導入には長所・短所がある」(5回)、「わからない」(5回)という回答が見られたことである。一方で「早いうちに(段階で)」(7回)という表現もより多く見られた。

2011年以降、「どちらでもない」を選択する学生が減り、履修者が次第に小学校での英語教育を必要とする立場を示すようになった。記述には「国際化(グローバル化)」(2011年7回, 2012年10回, 2015年6回)という表現が増え「早いうちに(段階で)」(2011年7回, 2012年6回, 2014年11回, 2015年6回)という表現も肯定的な文脈で使われるようになった(例. 英語は必要だから、早い段階から学ぶべき)。また、特徴的なのは「時代の流れ・既にきまったことだから」(2014年2回, 2015年1回)という記述があったこと、また「コミュニケーション」という単語が(2010年1回, 2012年1回, 2015年4回)

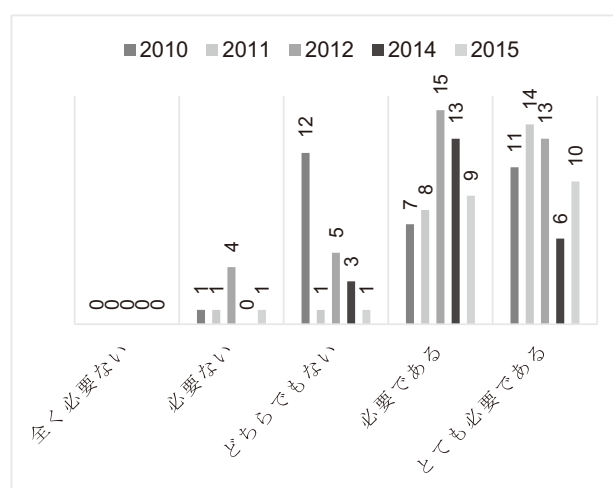


図3 公立小学校での英語教育の必要性に関する回答(履修前)

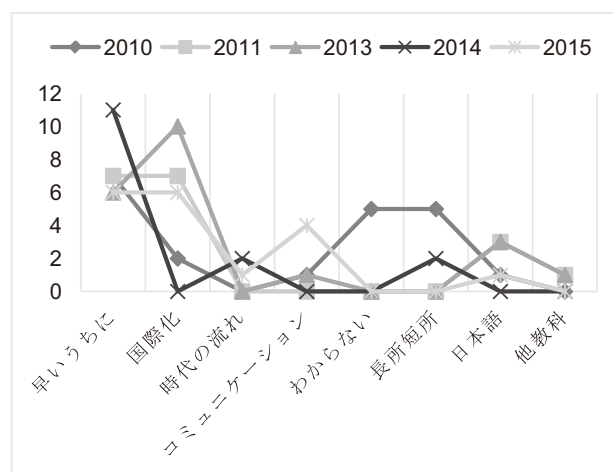


図4 記述欄に多く見られた単語・表現(履修前)

登場するのだが、2015年について4回のうち3回が「コミュニケーションとしての英語」という組み合わせで使われており、その必要性を訴えるコメントであった。また、5年間を通じ、日本語の方が重要である、あるいは他教科に時間を割くべきだという指摘も見られた。

6. 考 察

本節では、考察を研究課題に沿って詳述する。

6.1 「外国語活動Ⅰ」の履修前後で、参加者は小学校での英語教育に関する知識が変化したと感じているか、また年度による知識の変化に違いはあるか

時間と年度を2要因とする二元配置分散分析を行った結果、時間と年度の交互作用が有意であったので、単純主効果の検定を行った結果、時間の要因において、年度を超えて履修後の数値が有意に高いことが確認された。一方、年度の単純主効果には有意差が見られなかった。このことから、5年間を通じて、「外国語活動Ⅰ」を受講することで、参加者は、小学校での英語教育に関する指導に必要な知識を増やしたと感じていることが確認された。これは、授業の効果の一端を示すものである。

さらに、どのような知識がついたと感じているかを調べるため、授業で扱った39項目それぞれについての知識・理解に関する参加者の回答を見ると、履修前後で上位5項目に順番の入れ替えが起こっていることが確認された。履修前の、社会の反応を含めた教育制度上の知識に加え、履修後には、絵本の用い方、歌・チャンツの扱い等、授業実践の関わる具体的な指導法の知識が上位に加わり、授業を受けての知識の広がり意識していることが推察される。一方、下位5項目については、数値は上昇しているものの、項目に大きな変動がないことが分かった。具体的には、授業を実践するために必要な、カリキュラムの作り方、指導案の書き方、教材の上手な作り方という3項目が、参加者自身が知識が乏しいと判断した項目である。こういった項目は、実際に自らが指導案を作成する、教材を作ってみる、カリキュラムを構築する、という経験をしないと知識を確固たるものにはできないと考えられる。小学校での英語の授業体験・模擬授業を可能にする時間・科目が、小学校教員養成課程のカリキュラムの中に位置づけられることが望ましい。

6.2 「外国語活動Ⅰ」の履修前後で、参加者は小学校での英語教育に関係する不安が変化したと感じているか、また年度による不安の変化に違いはあるか

時間と年度を2要因とする二元配置分散分析を行った結果、時間と年度の交互作用が有意であったので、単純主効果の検定を行った結果、時間の要因において、年度を超えて履修後の数値が有意に低いことが確認された。さらに、年度の単純主効果においても有意差が見られた。このことから「外国語活動Ⅰ」を受講することで、参加者は、小学校での英語教育に関する不安を軽減したと認識していることが確認された。ただし、どの程度軽減されるのかについては、年度によって履修前に学生が抱えていた不安感にばらつきが見られるため、「外国語活動Ⅰ」を受講しても、十分に不安が軽減されない年もあり、注意が必要である。

さらに、どのような不安が軽減されたと感じているかを調べるため、授業で扱った39項目それぞれについての不安感に関する参加者の回答を見ると、上位・下位5項目に挙がった項目に履修前後でほとんど変化がなかった。特に、参加者の不安が強かった上位3項目は、カリキュラムの作り方、単元の組み立て方、指導案の書き方であり、これらは参加者が知識の乏しさを認識している項目でもある。授業実践の機会を設ける必要性がここでも確認された。

6.3 「外国語活動Ⅰ」履修者の小学校での英語教育の導入についての意見に変化はあるか

履修前の調査で「公立小学校で英語を教える必要はないと思う」という問いに対する参加者の回答を、年度を要因として一元配置分散分析を行った結果、年度毎の回答に統計的な有意差は見られなかった ($F(4, 134) = .85, p = .498, \eta^2 = .02$) もの、2010年は「どちらでもない」と中立の立場を選択した学生が履修者の3割強だったのに対し、2011年以降、小学校の英語教育を肯定的に捉える履修者が増えてきたのは事実である。

記述においても、「国際化（グローバル化）」「早いうちに（段階で）」という表現が頻繁に見られたことが興味深い。英語を使う必要のある時代に突入したのだから、少しでも早い時期に子どもたちを英語と出会わせたいという意見も少数派ではなくなった。ここ1、2年の特徴として印象的だったのは、「時代の流れだから」「既に（導入は）決まったことだから英語を指導していくべき」といった回答が少数ではあるが見られたことである。文科省が導入と決めたから、という理由ではなく、なぜ小学生に英語を教える必要があるのかを、学ぶ児童の立場に立って常に考える教師の姿勢が必要であろう。さらに、「コミュニケーションとしての英語」の必要性を訴えるコメントも見受けられた。今後、高学年において英語が教科化されるが、これまで領域という位置づけであったからこそ培われたであろう、外国語活動のことばのやり取りを中心に据えた授業の組み立てを失ってはならないと思う。

7. ま と め

5年間にわたる今回の調査において、「外国語活動Ⅰ」を履修した前後での140名の教育学部学生の小学校英語に関する知識・理解および不安感の変容を明らかにした。

その結果、「外国語活動Ⅰ」を履修することにより、この分野に関する知識を深め、広げたと履修者が認識していることが確認された。また、年度によって程度に違いはあるものの、履修により、統計的な有意差をもって不安感を軽減できていることが明らかとなった。ただし、指導案の作成、単元の組み方、カリキュラムの構築など、より実践に直結する内容については依然として履修者に不安が残る結果になった。

外国語活動についての知識・理解の拡大・深遠という点においては、本科目がそれを満たしているといえるが、実践的な事から（カリキュラム構築、指導案作成、教材選択）は、その機会を提供されなくては、学生はその不安を拭い去ることができない。授業実践の機会を設けることが、指導力のある教員を輩出するための条件の一つになるのではないだろうか。教育実習では、指導者が不在という理由で、英語を指導する経験ができない学生が多い。その点を考慮し、教育実習とは異なる形で英語を指導する実践の機会を学生に提供することが今後急がれる。

注

- 1) 文部科学省が『次期学習指導要領改訂に向けたこれまでの審議のまとめ（素案）』（2016）等で使用した表現であり、小学校のカリキュラム上、1時間を45分で計算した場合の時間数を指す。
- 2) 「授業研究入門」は小学校教員養成課程の選修ごとに開講されている科目である。本学部では教育実習だけではなく、頻繁に小学校を訪問し、授業を見学する機会がある。その手ほどきのクラスとして、実習のいろはを専門ごとに学ぶ科目として位置付けられている。

3) 本学部では、2016年度より、小学校教員養成課程に在籍する学生全員に対し、外国語活動に関する演習科目として「小学校英語指導」を必修化している。そのため、現在本学部が提供する小学校での英語教育に関する科目数は6である。

引用文献

- 小林美代子・宮本弦 (2007) 「公立小学校教師たちの英語指導観—公立小学校教員への意識調査より—」小林美代子 (編) 『早期英語教育の指導者養成および研修の実態と将来像に関する総合的研究』平成16～18年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 平成18年度研究成果報告書, pp.37-86.
- 小林美代子 (2010) 『早期英語教育指導者の養成と研修に関する総合的研究』平成21年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書.
- 佐々木洋・伊藤拓也 (2016年8月2日) 「小5英語20年度教科に」『毎日新聞朝刊』p.1.
- 高浜行人 (2016年8月1日) 「小学英语, 教科に格上げへ 新学習指導要領まとめ案」『朝日新聞』2016年9月23日アクセス <http://www.asahi.com/articles/ASJ7W41RCJ7WUTIL01P.html>.
- 著者名不明 (2016年8月2日) 「英語 小5から正式教科」『日本経済新聞』p.2.
- 東京学芸大学 (2016) 『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業平成27年度報告書』2016年9月22日アクセス <http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/report/>.
- 松宮奈賀子 (2008) 「小学校教員を目指す学生の『外国語 (英語) 活動に関する演習科目』履修がもたらす学生の変容」*Journal of Quality Education*, 3, 111-134.
- 物井尚子 (2010) 「小学校教職課程に期待されるもの—『外国語活動』授業力向上のために大学が提供できるシラバスを考える—」『東京純心女子大学紀要』第14号, 1-9.
- 物井尚子 (2011). 「『外国語活動』授業力を備えた教員養成のためのシラバスに関する一考察」『千葉大学教育学部研究紀要』第59巻, 21-27.
- 物井尚子 (2012) 「『外国語活動』授業力向上のために大学が提供できる授業を考える—学生の質問紙調査から—」『千葉大学教育学部研究紀要』第60巻, 97-103.
- 文部科学省 (2008) 『平成19年度小学校英語活動実施状況調査集計結果』.
- 文部科学省 (2009) 『小学校外国語活動ハンドブック』東京, 旺文社.
- 文部科学省 (2012a) 『平成23年度公立小学校・中学校における教育課程の編成・実施状況調査 (B票) の結果について』2016年9月22日アクセス http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2012/01/31/1315677_2_1.pdf.
- 文部科学省 (2012b) 『平成23年度小学校外国語活動実施状況調査の結果』.
- 文部科学省 (2013) 『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』2016年9月22日アクセス www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/.../1343704_01.pdf.
- 文部科学省 (2016) 『次期学習指導要領改訂に向けたこれまでの審議のまとめ (素案)』2016年9月22日アクセス www.mext.go.jp/b_menu/shingi/.../1375316_1_1.pdf.
- Statistical Package for the Social Sciences [SPSS]. (2012). *PASW Statistics for Windows, Version 21.0* [Computer software]. Chicago: Author.

資料1. 「外国語活動Ⅰ」に関する質問紙

「外国語活動Ⅰ」に関するアンケート

学籍番号 _____ 名前 _____

このアンケートは、これからあなたが履修しようとしている「外国語活動Ⅰ」に関するアンケートです。よりよい授業を作っていくための参考資料として教員が使用します。成績評価には影響しません。これに同意して頂ける方は、記入をお願いします。

1-1. あなたが小学校教員になったら、外国語活動の時間を担当することになります。外国語（おおむね英語）を小学生に教えることになるわけですが、以下の項目を十分に理解しているかどうか教えて下さい。なお、各項目は外国語活動を担当する皆さんにぜひ知っておいて頂きたい、この授業で扱うことを予定しているものです。

	よく理解 している	いくらか 理解して いる	どちらで もない	あまり知 らない	全く知ら ない
1 外国語教育が公立小学校に導入されるようになった経緯	5	4	3	2	1
2 日本の公立小学校で外国語教育をはじめる意義	5	4	3	2	1
3 公立小学校における英語導入の背景	5	4	3	2	1
4 公立小学校における英語導入の現状	5	4	3	2	1
5 国際理解教育ということば	5	4	3	2	1
6 国際理解教育と「外国語活動」の時間の関係	5	4	3	2	1
7 「外国語活動」の時間と、中学校、高校の英語の授業との繋がり	5	4	3	2	1
8 小学校教員のための「外国語活動」研修	5	4	3	2	1
9 校内でできる外国語活動に向けての環境づくり	5	4	3	2	1
10 教室内でできる外国語活動に向けての環境づくり	5	4	3	2	1
11 「外国語活動」（以下、授業とする）で使用できる教授法	5	4	3	2	1
12 授業の目標設定	5	4	3	2	1
13 授業で指導する内容	5	4	3	2	1
14 教員が授業で使える英語表現	5	4	3	2	1
15 教員が知っておいたほうがよい文法事項	5	4	3	2	1
16 英語の発音のコツ	5	4	3	2	1
17 教員が授業で使う教具の上手な作り方	5	4	3	2	1
18 教員が授業で使う教具の上手な選び方	5	4	3	2	1
19 CD、DVDなどの音声教材活用法	5	4	3	2	1
20 インターネット、電子黒板などのマルチメディア活用法	5	4	3	2	1
21 授業で小学生が使う教材の上手な選び方	5	4	3	2	1
22 授業で小学生が使う教材の上手な作り方	5	4	3	2	1
23 カリキュラム（1年間の指導計画）の作り方	5	4	3	2	1
24 1単元（2～4クラス）の組み立て方	5	4	3	2	1
25 指導案（1クラス）の書き方	5	4	3	2	1
26 1時間の授業での活動のつなげ方（どういう順番でどんな活動をするか）	5	4	3	2	1
27 授業の評価	5	4	3	2	1
28 ALT（Assistant Language Teacher）との関わり方	5	4	3	2	1
29 子どもの言語習得（言葉をどのように学んでいくか）	5	4	3	2	1
30 アジア（台湾、韓国、中国）の英語教育	5	4	3	2	1
31 児童・発達心理学の観点からみる子ども（動機、態度、自尊心）	5	4	3	2	1
32 低学年に対する指導法	5	4	3	2	1
33 高学年に対する指導法	5	4	3	2	1
34 リスニングの指導	5	4	3	2	1
35 リーディングの指導	5	4	3	2	1
36 スピーキングの指導	5	4	3	2	1
37 ライティングの指導	5	4	3	2	1
38 歌・リズムの指導	5	4	3	2	1
39 絵本を用いた指導	5	4	3	2	1

- 1-2. 上記の項目以外で、あなたが外国語（おおむね英語）を教えるために知っておくべきだと思うことがありますか。もしあれば、それを記述して下さい。いくつでも構いません。

- 2-1. あなたが小学校教員になって、外国語（主に英語）を教えるとき、不安に感じるのはどの項目ですか。

	非常に不安である	やや不安である	どちらでもない	あまり不安でない	全く不安でない
1 外国語教育が公立小学校に導入されるようになった経緯 (中 略)	5	4	3	2	1
39 絵本を用いた指導	5	4	3	2	1

- 2-2. 上記の項目以外で、あなたが不安に感じるのは、どの項目ですか。もしあれば、それを記述して下さい。いくつでも構いません。

- 3-1. 公立小学校で英語を教える必要はないと思いますか。

そう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	全くそう思わない
4	3	2	1

- 3-2. それはどうしてですか。

ご協力ありがとうございました。

資料2. 「外国語活動Ⅰ」年間カリキュラム

- | | |
|--|---|
| 1 ○オリエンテーション：本科目の授業展開，課題，評価に関する説明
○外国語活動に関する質問紙調査 | 9 ○スピーキングの指導
○教室英語 8 |
| 2 ○新学習指導要領のねらいと外国語活動導入までの歴史を振り返る
○教室英語 1 | 10 ○リーディングの指導
○教室英語 9 |
| 3 ○子どもの言語習得（第一言語と第二言語）
○教室英語 2 | 11 ○ライティングの指導
○教室英語 10 |
| 4 ○心理学研究からの示唆
○教室英語 3 | 12 ○絵本と歌・チャンツを用いた指導
○教室英語 11 |
| 5 ○英語教授法の基礎
○教室英語 4 | 13 ○言語能力の測定と評価
○教室英語 12 |
| 6 ○シラバス・デザインの意義（年間・単元シラバス）
○教室英語 5 | 14 ○低学年および高学年に対する英語指導
○教室英語 13 |
| 7 ○レッスン・プランの基礎・基本
○教室英語 6 | 15 ○Hi, friends!の分析と使用
○教室英語 14
○外国語活動に関する質問紙調査 |
| 8 ○リスニングの指導
○教室英語 7 | |